

# 〇〇もんずら



## 微妙な関係

コツンコツン。〈お掃除ロボット〉が壁にぶつかって進行方向を変えます。ジーーーー。まっしぐらに進んでいきます。コツンコツン。またぶつかりました。方向転換して進みます。ジーーーージーーーー。今度はマットに上がれないでいます。バックすればいいのに、なかなかあきらめません。仕方なく手で押してもどしてあげます。ジーーーー。方向を変えて進んだのを見て、一安心。掃除を任せて他の仕事をしながら、なぜか気になる〈お掃除ロボット〉。この繰り返しですが、かいがいしく働き、部屋の隅々まできれいにしてくれるその姿を追いかけては、ちょっと手を貸している自分がいます。



こんにちは。うーん、いい空気、このまま頑張りますね。加湿のお手入れランプが光っています。水回りのお手入れをしてください。24時間使っても安心の電気代ですよ。またね。元気な声の主は空気清浄機。それに答えている私。お久しぶり！休んだこともわかってるの？

「来た来た来た！」ファミリーレストランの客席から、子供の嬉しそうな声。大人もホールをコトコト動いて近づいてくるものに注目しています。「ご注文のお料理を持ってきましたニャー。」猫の顔をした配膳ロボットが料理を運んできました。テーブルへの配膳は、お客自らが行います。このちゃっかりぶりが微笑ましくもあり、配膳を手伝うお客自身も満足げ。「人の代わりになっているのかなあ。」と思う人もいれば、「人に気を使わなくていい。」と考える人もいます。(私は未体験ですが)

暮らしの中に便利なシステムや家電製品、高機能なロボットなどが登場。いつの間にかそういうシステムやロボットに〈してもらう〉のが当たり前を感じている時があります。〈してもらう〉側は「もっといいものを」と要求がエスカレートし、新しい機能がどんどん追加され、使いきれていないこともあります。私の場合は、洗濯機の手洗いとドライがどう違うのかわからないまま、何となく使っている段階です。

便利なモノだけに囲まれて、本当に幸せなの？「人らしさ」が奪われているのでは？という疑問を持ち、〈弱いロボット〉を研究している方がいることを知りました。完全無欠なロボットではなく、弱みや苦手を持ち、周りの助けを得て相手のできることや強さを引き出すロボットとのこと。配膳ロボットもその一つと言えそうです。